

9月の定例研究会では、大佛次郎読書会の小池敬吉氏による講話と、クイズ（作成案）の確認を行いました。

「私が見たもの、考えたこと——原三溪と私」

講師：小池敬吉氏（大佛次郎読書会）

大佛次郎読書会は原三溪市民研究会と交流があり、小池氏も当会の五浦スタディ・ツアーに参加されました。今回は、映画制作に携わってきた小池氏に、三溪園で見たものなどについて視覚的に語っていただきました。

まずは臨春閣の公開時に見学できる十二支の板絵について。着物姿の干支の動物が6枚に分けて描かれていますが、子丑寅卯と戌亥は左から順に並んでいるのに対し、辰巳午未申酉は右から順です。質疑応答では、十二支は時刻や方角を表すのでその並び順には何か意味があるかも知れないとの意見がでて、時刻が昼か夜か、或いは動物の大きさ順か、そして巳だけが女性の姿だ、などと盛り上がりました。

東京国立博物館に所蔵される下村観山の屏風《鶴》を、小池氏は仕事で撮影したことがあります。右隻の大部分を岩壁が占め、右から4対3の画面で撮れば鶴は片翼しか映らず、一方で左隻の鶴は小さくて、アンバランスな印象だったそうです。五浦ツアーの後である崖は六角堂の崖で、六角堂があるはずの場所に立つ鶴は五浦の画家たちの気持ちの象徴でないかと直感したそうです。

下村観山作《弱法師》については、屏風の形に折った図版を使いながら、屏風に向かって右側から作品に近づくと先に弱法師と梅が見え、歩いて左隻へ移動すると弱法師が隠れて太陽が現れるという立体構造を解説してくださいました。



クイズ（作成案）の確認

3択形式のクイズを作ってくることが前回の宿題でした。会員からは、クイズは藤本實也著『原三溪翁伝』を基本として時代背景をはっきり説明するものがよい、と提案がありましたが、廣島さんからは導入として三溪園についてのクイズがあってもいいのではないかとのコメントがありました。

その他に尾関さんから、9月1日に岐阜市柳津町で三溪園の川幡さんによる講演が行われたことなどについて報告がありました。

